

表紙の“人” Mr.フィギュア

今月の一言



イツモ心ニ太陽ヲデイタイヨウ

美しいメロディ、壮大な風景、ソフィアローレン主演の名作映画「ひまわり」。映画に興味を持ち始めた若き日、スクリーンいっぱいひまわり畑はよく覚えている。今月の表紙の写真はある夏の日、琵琶湖のホテルのプールサイドに日差しを独り占めにして真っ直ぐに咲き誇っている太陽の子「向日葵」。小生、夏生まれのせいか、この花に対する想いは格別である。名前の由来は太陽に向き合い、その動きを追う。だから花言葉は「あなただけを見つめます」。そんな一途な花なのです。（もしや蠍座の女か、ちよつと怖い？）

「イツも苦手、加山雄三のような海の男でもなくせにである。これまた、若かりし日々の話ですが、今は無き観音崎ビーチホテルで女性雑誌の撮影中、輝く日差しの中、穏やかな海面を沢山の大小の船舶が行き交う景色がなぜか今も忘れられない。きつと感動的に思えたのは、景色はもちろんだが、怖いもの無しの若さと、希望に満ちていたからだろう。以前、地元の新舞子という海にカーメルハウスという素敵なカフェがあり、そのオーナー曰く「海は四季ごとに趣が違う。例えば冬、降り注ぐ雪が海面に吸い込まれるシーンは幻想的だ」とのこと。嗚呼、海を眺めるいい家を持てたら、寄せる波音と大瀧詠一でも聞いてぼんやり寝転んでいたいなあ。

表紙のタイトル『いつも心に太

陽を』は、諺のように定着しているが、いつ、誰の言葉なのか？どこか似ている「少年よ大志を抱け」はクラーク博士の言葉だが……さてその起源はドイツの詩人フライシュレンの詩。

「心に太陽をもて 嵐が吹こうが、雪が降ろうが、天には雲 地には争いが絶えなからうが、心に太陽を持って そうすりゃ何が来ようと平気じゃないか どんなくらい日だつて それが明るくしてくれる」

戦争迫る昭和10年、「路傍の石」

Mr.フィギュア 本誌の表紙に登場した一見あやしい、どこか可愛い、中年男性。愛犬チャーチルとはいつも一緒。その正体は、実在するビジネスマン恒川憲一氏をモデルに作られたフィギュア。月刊正論の表紙とこのコラムで、厳しく優しく、ダジャレをオシヤレに織り交ぜた温かいメッセージを、読者のみなさまに届けている。

などの著者、山本有三が訳したこの詩は「唇に歌を持って、他人のためにも言葉を持って」と続く。争いが絶えない現代、この昔の詩が今でも心に響くのはある意味残念でありますね。さて心に太陽って、果たして何だろう？「希望？夢？信念？愛？仏様？神様？カミさん？お金？」。人によって違うはず。諸兄もこの機会に自分にとつての太陽とは何か？を決めていただくのもよろしいかと。

さて、向日葵はフランス語でソレイユ、そして誰もが希望を失つ

恒川憲一氏 つねかわけんいち クリエーター。株式会社シーエムバー代表取締役社長。大阪芸術大学デザイン科を卒業後、広告代理店勤務を経て独立。15年間、絶えずフィギュアを持ち歩き撮影し、ダジャレを考えている。このコラムの真の執筆者。著書に「フオツト、一息」（セルバ出版）。



た終戦直後、中原淳一がはじめて創った雑誌「それいゆ」（ひまわり社）は、夢と憧れを込めた新しい形式のスタイルブックとして若い女性達に輝きを与えたのです。まさに向日葵は気高く強く美しい花なのです。さあいいよ、待ちに待った「太陽の季節」。これまた原点は昭和31年芥川賞受賞、石原慎太郎著「太陽の季節」。裕次郎も急遽出演し、これが映画デビューになったなど話題になりました。以上、ひまわりの花のごとく回り回ったお話でしたが、今後、先程の海の見える素敵な物件が見つかつて、ひまわりならぬ利回りを考えず、日焼けへのタイヨウが遅れて痛いようにならないよう皆様も、お陰サマーで幸せに！

P.S. 写真大喜利コンテスト募集、「ミスターフィギュアに挑戦！」で検索してね！